

2 種の書物：紙と電子 ―背反する主張、絶対値は同じベクトル―

北 克一

背反する二つの書物群の紹介を書評のスタイルで取り上げる。

前半で紹介するのは、次の 2 冊である。

ヒュー・マクガイア & ブライアン・オレアリ編『マニフェスト 本の未来』ボイジャー, 2013, 2.

オライリー・メディア編『ツール・オブ・チェンジ: 本の未来をつくる 12 の戦略』ボイジャー, 2013, 11.

共に、図書、雑誌のデジタル・コンテンツ化への現状、変革への挑戦、さらには未来の展望を述べた書物である。

後半で取り扱うのは、書物のデジタル化、図書、雑誌などの生産、流通過程から、「本」の本質とはなにかを問う、立場である。具体的には、次の 2 冊である。

福嶋聡『紙の本は、滅びない』ポプラ社, 2014. 1.

内沼晋太郎『本の逆襲』朝日出版社, 2013. 12.

である。

前者の 2 冊は、共に電子書籍や Web 上のデジタル・コンテンツの現在地平や新しい試み、未来の本の姿を想像し、創造しようとしている。

後者の 2 冊は、オンライン書店や電子書籍をも目配りしながらも、本、本屋の文化的意味や社会存在価値を信頼し、出版社、書店は滅びないと「本道」を伝道する。

一見、両者の立ち位置は正反対に見える。しかし背反する主張は、実は逆ベクトルの絶対値で通底している。具体的には、以下の目次紹介を含んだ若干長い新刊紹介を参照されたい。

相愛大学

新刊紹介 北 克一

ヒュー・マクガイア&ブライアン・オレアリ 編
『マニフェスト 本の未来』 ボイジャー,
2013,2.

x, 339p 21cm 定価 2,940 円(印刷版・税込)、
1,050 円(電子版・税込)

ISBN:978-4-86239-117-9(印刷版)

URL: <http://binb-store.com/>(電子版)

本書は、Hugh McGuire&Brian O'Leary ed.
“Book: A Futurist's Manifesto: A Collection of
Essays from the Bleeding Edge of Publishing”
©2012, O'reilly Media. の翻訳書である。原書名のほ
うが本書の内容をより適切に表現している。

本書は「本の未来へのガイドブックとして、出版
の最前線で活躍している人たちが執筆した論考集」
(p.3)であり、3 部 27 論文から構成されている。長文
になるが、本書の内容を最も適切に伝えるものとし
て目次を引用する。なお、紙数の都合上、個々の論
文執筆者名は割愛した。記して謝しておきたい。

日本語版の刊行にあたって

原書の刊行にあたって

イントロダクション

Part1 セットアップ—現在のデジタルへのアプ
ローチ

1. コンテナでなく、コンテキスト
2. あらゆる場所への流通
3. 「本」の可能性
4. メタデータについて語る時に我々の語ること
5. DRM の透視対効果を考える
6. デジタルワークフロー向けツール
7. デジタル時代の書籍デザイン

Part2 将来への展望—本が歩む次のステップ

8. 本と Web サイトがひとつになる理由
9. Web 文学: ソーシャル Web 出版
10. 言葉から本を作る
11. eBook はなぜ書き込み可能になるか
12. 読書システムの垣根を越えて: ソーシャルリ
ーディングの今後
13. ユーザー体験、読者体験
14. 本と出合ったアプリ
15. 形なき本で図書館を作ること

16. 読者の権利章典

Part3 本でできる実験—最先端プロジェクト

17. 作家たちのコミュニティ
18. アプリとしての本作り、迷ったときの処方箋
19. エンゲージメント・エコノミー
20. 本はどのようにして発見される?
21. 「リトル・データ」の驚くべき力
22. 誇張と倒錯
23. 出版再考—痛みを感じ、痛みを抑える
24. 公共図書館の終わり(私たちが知っていたよ
うに?)
25. 今は実験のとき
26. 忘れられた消費者
27. コントロールできない会話

Part1 では、現在のデジタル情報環境下において、
著者、出版社、読者などにとって、変容しつつある
出版流通慣行を背景として、「本」というものに対す
る根源的な理解を問い、そこでの出版社の役割につ
いて再検討が試行錯誤されている。

例えば、「アップグレードできる本」、「コンテキス
ト・ファースト論」、「DRM のコスト計算」、「ポス
ト出版システム」などの刺激的な言辭が並ぶ。

Part2 では、電子書籍(本書では eBook)を紙媒体
書籍のデジタル版ということではなく、ネットワー
クに接続された新しいデジタルオブジェクトとして
論考が展開される。内容はさまざまな新しい知識、
情報の形成、流通、蓄積を通じたコミュニティの創
設への希望の実験報告である。

ここでも「紙の本+eBook < 紙の本+eBook+
Web ブック」、「ソーシャル Web 出版」、「リードソ
ーシャル宣言」などの耳目を引く概念が提唱される。

Part3 においては、本の未来を創造しようとする
プロジェクトや企画の実践紹介である。未来の本に
ついてただ考えるのではなく、現在においてそれを
生み出そうとする営為である。ここにあるのは、未
来の本をめぐる健全な多様性の世界である。

全 3 部を通じて、個々の論考間に一致した方向性
はなく、互いに矛盾した論考も並立している。技術
的には、電子書籍の Web サイト、eBook、アプリの
3 者が生み出す情報環境生態系の考察であり、その
創造への挑戦である。

ここには商業的閉鎖プラットフォームの息苦しい不
毛滞滯ではなく、豊かなネットワークの原野が広が

っている。

インターネットの黎明期における「ホールアース・カタログ」を彷彿とさせる、今まさに生み出されようとしている電子書籍の新しい世界を垣間見ることができる。電子書籍についての考察のための刺激的な書である。

出版関係者のみならず、広く図書館関係者にも一読をお勧めしたい。新しい書物を取り巻く文献宇宙とそこでの図書館の役割を考える時の必読書といえよう。

なお、すべての原論文の Web 版への URL が表示されている。さらにフォローアップ情報は次のアドレスで提供されている。本書の主張でもある「新しい本」への試みの始まりであろう。

ボイジャー Twitter: @voyagerDPD

ボイジャー Facebook:

<https://www.facebook.com/voyagerDPD/>

さらに、印刷版と電子版の価格であるが、税抜き価格で、印刷版は 2,800 円、電子版は 1,000 円と 2.8 倍の価格差異がある。日本における多くの電子書籍販売価格体系とは彼我の差がある。ここにも電子書籍の価格体系を考えていくヒントがあろう。

時期を得た出版を歓迎したい。

新刊紹介 北 克一

オライリー・メディア編

『ツール・オブ・チェンジ: 本の未来をつくる 12 の戦略』ボイジャー, 2013, 11.

xiii, 199p [21cm]

定価 525 円(電子版・税込)

URL: <http://binb-store.com/>(電子版)

本書は、先に取り上げたヒュー・マクガイア&ブライアン・オレアリ編『マニフェスト 本の未来』の続編とでもいう書である。内容は、オライリー社が開催した TOC カンファレンス (Tools Of Change for publishing) の TOC コミュニティサイトに 2012 年にポストされた多くの記事の中から、「精選」された記事で構成されている。編者は次のように本書編纂の意図を述べている(p.xiii)。

ここには電子書籍を完結し、閉じられたコンテ

ンツととらえる視点はない。新しいインタラクティブなコミュニケーションの場の創造である。

(中略)

わたしたちは TOC コミュニティをさらに活発なものにするため、このコレクションがより深い議論に繋がることを期待しています。(中略)ご感想やご意見を toc.oreilly.com までお寄せいただければ幸いです。

全体構成は 12 章のカテゴリー別となっている。読者は興味に応じて、どの章から読み進めてもかまわない。また、各章に収録されている個々の文章間に統一された見解、方針はない。この意味で読後感、12 カテゴリー旗の元に集積された「バザール」を巡る知的巡礼のようである。

なお、コンテンツの性格上、章単位などでの論評に替えて、収録されている記事のタイトルを以下に示す。個々の執筆者名は略した。記して謝す。

第1章 イノベーション

アジャイル方式が出版社を救う

ESPN の戦術ノートより

パーセプティブ・メディア: 古いメディアの壁を打ち破る

Kindle Fire 対 iPad: 「まずまず」では勝てない

ソーシャル機能の開発は避けるべき: わざわざ最初からやり直すことについての考察

スタートアップ企業と出版社: 簡単に片づけられない話

出版インキュベータを作る時

スピードの遅い eBook イノベーション
古いものにも価値がある

読書体験とモバイルデザイン

シリアル小説: 流行は繰り返される

第2章 収益モデル

いまやコンテンツだけでは勝負できない
アマゾンと eBook とプロモーション

中古 eBook の新しい命

書籍内課金

中古 eBook のエコシステムが有意義な理由

第3章 リッチコンテンツ

	インタラクティビティ:まだ理屈に合わない過渡期にいる現状 eBook はこれで十分?		
第4章	データ データを物語に変換する 崩壊する出版マーケティングをビッグ・データが救う 「ビッグ・ブラザー」のような eBook 書店の登場?	第9章	法律 フェアユース:言論の自由の狭く入り組んだ安全地域 eBook の貸出し VS 所有 削除要求を招いたスクリーンショット、リンク、賞賛の言葉
第5章	DRM と囲い込み eBook フォーマットの標準化と DRM 放棄の時代が来た! 問題を解決しない「軽量」DRM 自責の Kindle:読者は eBook プラットホームに囲われることを後悔するか アマゾンの中性化 アマゾン 7 庭園の囲いを高くするレンガ、Kindle シリアルズ	第10章	フォーマット オープンウェブのためのポータブル・ドキュメント(パート 1) オープンウェブのためのポータブル・ドキュメント(パート 2) オープンウェブのためのポータブル・ドキュメント(パート 3) 上品に劣化する eBook iOS6 と Andoroid と HTML5 レスポンス・コンテンツ HTML5/EPUB3/ eBook VS ウェブアプリ ネイティブアプリとしての eBook VS ウェブアプリ アプリとしての本は真面目に検討すべき課題
第6章	オープン 「オープン」出版の未来 フリーと媒体 VS メッセージ オープン API で読者コミュニティを作る 一度買えば、同期はどこでも	第11章	価格 海賊版と価格と秘蔵 eBook eBook の価格と価値についての提案 eBook の価格とフォーマットの明るい未来
第7章	マーケティング 基本的には変わっていないオーサー・プラットフォームと急速に変化を遂げるツール eBook サンプルの悲しい現状と 4 つの改善法 図書館と出版社の協力:ディスカバナビリティと流通 出版業界のリスク低減策 検索と発見:身売りする出版社 オンライン・コミュニティのキーとなる 7 つの要素	第12章	プロダクション ニュー・ニュー・タイポグラフィ BookJS はブラウザを印刷物の組版エンジンに変える eBook に必要な標準化 InDesign VS CSS 数式の組版 WYSIWYG VS WYSI Kindle ほしいもののリスト(2013 年版)
第8章	ダイレクトセールス 隠れた傾向を明らかにするダイレクトセールス 直販チャネルと新しいツールがもたらす自由と柔軟性 ブランドですよ、お馬鹿さん! 潜在性を持つニューヨークの eBook ニシアティブ		個々の方の興味、関心、立場、意見に応じて、同意、反発、共感、肯定/否定などの感覚が沸き起こるであろう。しかし、感覚を感覚のままに留めおくのではなく、それを言説化し、多くの人々と交換して欲しい。 それから未来の本をめぐる言説空間が生み出される一歩が始まるのだから。

なお、本書は一般発売に先行して、ボイジャー社より BinB(ビー イン ビー)システムの元に発売され、ブラウザのみで体験できる新しい電子読書環境の体験・普及も兼ねていたようである。さらに、一般発売後には、先行購入者に PDF、EPUB のファイルもダウンロード可能としている。

本書の発売自体が、通常の電子書籍販売サイトとは、一味も二味も異なる実験的な試みといえよう。

また、フォローアップ情報として、本書の出版社であるボイジャー社の次が示されている。

ボイジャー Twitter: @voyagerDPD

ボイジャー Facebook:

<https://www.facebook.com/voyagerDPD/>

電子書籍、電子出版にご興味のある方、本の未来にご関心の方などに、前書『マニフェスト本の未来』と併せて、強く、ご一読をお勧めしたい。

新刊紹介 北 克一

福嶋 聡著

『紙の本は、滅びない』(ポプラ新書; 018)

ポプラ社, 2014.1.

256p 18cm 定価 780 円(税別)

ISBN:978-4-591-13742-0

本書全体は3章で構成されている。

第1章 電子書籍は、紙の本に取って代わるのか？

もしも、本がなくなったら

本は便利な「乗り物」

黒船来航? 『電子書籍の衝撃』の衝撃

本、それはいのちあるもの

ヴァーチャルとアクチュアル

『ペーパーレスオフィス』の神話

本屋の起源

定本は、紙か電子か?

「本は、失くなるから、いい」

「Web2.0」の迷走

著作権をめぐる

そして、電子書籍三年

アマゾンはどうしてこんなに強いのか?

か?

マテリアル・フリーなコンテンツなどない

第2章 デジタル教科書と電子図書館

ミネルヴァのフクロウ

マルチメディア

「これまでの教科書は間違っている」?

もっと議論を

ICT化議論は、教育の理念の変遷を顧みさせ、いまのありようを問う

校務への ICT の導入

大学と出版

「書店も図書館も元気です、か?」

長尾構想

第3章 書店は、今……

書店は、今……迷い込め、本の樹海へ

「魅力ある書店の棚づくり」

「仕事」と「しごと」

右肩下がり

再販制の弾力運用とゆらぎ

RFID タグの可能性

構造疲弊? 危機感と業界再編

専門学校受付とグーグル

「せどり屋」と再販制の逆向きの崩壊

「古書」『IQ84』

「せどり屋」とアマゾン

倉庫と売り場

「情熱を捨てられずに始める小さな本屋。」

それが全国に千店できたら……」

あとがき

冒頭で、著者は「書店の店頭に立つ者として、書物という商品の力を本気で信じている」(p.18)と表明し、その力の源泉を3点掲げる。

(1) 携帯性、簡易性

(2) ファッション性、

例えば、浅田彰『構造と力』を持ち歩くこと、は身にまとうファッションであった、と喝破する。1959年生まれの福嶋氏の青春時代であろう。

(3) ブランド性、典拠(カノン)性

「原理的に容易に変更可能なディスプレイ

イ上の文字と違って、印刷された文字の変更・改竄が困難であり、コンテンツに典拠性が宿ると思われる冊子体(=印刷本)こそ、「定本」というテキストのメディアにふさわしい」(p.41)と印刷文字、書物の典拠性を述べる。

著者のメディア観についても見ておこう。

「メディアを不要とするコンテンツはなく、物質性から完全に自由なメディアはない」(p.88)とデジタル・コンテンツにおいてもメディアの物質性は逃れ得ないことを論じる。

そして、「自由な言説の乗った書物というメディアを、ぼくたち書店員は読者に届け続ける。(中略)その仕事にぼくたちは、矜持持ち続けていきたい」(p.90)と誇りをもって言い切る。

書物を取り巻く情報環境生態系への言説にも、著者の独自のものがある。第2章からの抜粋で見る。

「出版産業の黄昏の時代にいくつもの大学出版会がミネルヴァのフクロウのごとく飛び立ったことは、近代の世界、日本双方において大学が出版を後追いしてきた歴史の、フラクタルな縮図といえるかもしれない」(p.129)という発言や「ぼくたちがよく知っている図書館や書店は「近代」が生み出した」、「書店も図書館も「近代」の理念や制度とセットなのだ」(p.144)、「書物を守りたい、書店を守りたい、図書館を守りたいという信念が、その「否」を担保すると信じながら」(p.146)と述べる。評者はこれらの言説に現実的なロマンチスト像を垣間見た。

第3章は書店を巡る論考である。

「書店が、読者を誘い、迷い込ませる空間となるためには、何よりもその書棚が魅力的なものでなければならない」(p.151)と宣言し、「自覚的な書店員たちは、多様性にこそ書店の存在意義があることを知り、自らの店の個性を育み、アピールしていく努力を続けてきた」(p.155)と職への誇りと矜持を言い切る。

最後に著者の再販制への言説を紹介しておく。村上春樹『1Q84』を例に、「末端読者が「定価超え」でも本を買っているという事実、これ

こそ「再販制」の崩壊ではないか。そのような事態を招来しているのは、一部書店への「偏重配本」によって、中小書店には「客注」さえ確保されないという構造ではないか」(p.178)と一書店員の目線で厳しい指摘をし、「責任販売制」の導入を後押しする。

著者は知る人ぞ知る全国展開をしている大型書店のジュンク堂の難波店店長(本書刊行時点)である。『書店人のしごと』、『書店人のこころ』、『劇場としての書店』、『希望の書店論』など多くの書物を世に問ってきている。

本書もその延長にある。しかし、社会へのオンライン書店の定着と、電子書籍の足音は著者を幾分「前のめり」にさせているように感じた。

背筋を伸ばしたオールドリベラリストの面目躍如といった雰囲気が漂う。

なお、巻末の「参考・引用文献」一覧は、著者の知的格闘の軌跡を垣間見られると共に、書物ワールドへの初心者向けの「パスファインダー」ともなっている。けだし、文献一覧はすべて「紙資料」である。

本書の「下書き」が会員制雑誌『ジャーナリズム』(朝日新聞社)及び人文書院のホームページの連載コラムであったことを勘案すれば興味深い。

図書館員、書店員のみならず書物を取り囲む情報環境生態系にご興味の方々に一読をお勧めしたい。

新刊紹介 北 克一

内沼 晋太郎著

『本の逆襲』(idea ink; 10)朝日出版社, 2013.12.

176p 18cm 定価 940円(税別)

ISBN:978-4-255-00758-8

本書は、全4章から構成されている。最初の第1章では、まず自己紹介を兼ねて、「ブック・コーディネーター」という職について解説をしている。「既存の肩書では説明ができないので、本と人との出会いを作る、そのあいだにあるものをコーディネートする仕事というこ

とで、ブック・コーディネーターと名乗るようになりました」(p.011)と述べる。

続けて、さまざまな本をコーディネートした実例が紹介される。「文庫本葉書」、「覆面文庫本」、「ほんのまくら」などの催しである。個々のプログラムの詳細は割愛する、というか本書を読んでのお楽しみ、としておこう。

著者はこれらのプログラムを「本にまつわる多すぎる情報をひとつに絞る」、「一節を引用して切り出して流通させる」の2点の方法の凝縮という。

一方、本と人との出会い演出では、カフェーでの「月替わりで5タイトルずつの文庫本とセットにするドリンクが並んだメニュー」(p.038)などの実践例も紹介される。

後半では、「デジタル技術が生まれて、印刷の必要がなくなったのと同時に、冊子ではなくまるで石版や樹の皮のような、一枚のタブレット状にまた戻ったのが現代である」(p.042)とし、本の範囲を拡張していく。

『タウンページ』が本なら、携帯電話に登録した電話帳さえも本」、「スマートフォン版の写真集が本なら、撮った写真をプレビューしているデジタルカメラの画面だって本」、「すべてのゲームソフトはきつと本」、「2チャンネル」のスレッドも誰かのTwitterのつぶやきも本(p.042-044)と過激に本の領域を拡張してみせる。

一方、「出版業界がISBNというコードで管理している本には、ブランドの名前がはいったトートバッグや腰に巻くだけで痩せるヒモや、レンジで簡単に調理できるシリコンスチーム鍋まで、すべて含まれている」(p.044)と内沼ワールドの混迷へと読者を引き込もうとする。

「本はもはや定義できないし、定義する必要がない。本はすべてのコンテンツとコミュニケーションを飲み込んで領域を横断して拡張していく」(p.045)が、著者の第1章での結語である。

第2章は、既存の出版・流通界についての著者の認識・まとめと電子書籍、インターネットの溶ける境界の問題意識ととらえた。「本はインターネットに溶けていく」(p.068)が、1980年生まれの著者の感覚であろうか。

第3章では、「これからの本のための10の考え方」が示され、それを巡る連続エッセイである。

1. 本の定義を拡張して考える
2. 読者の都合を優先して考える
3. 本をハードウェアとソフトウェアとに分けて考える
4. 本の最適なインターフェイスについて考える
5. 本の単位について考える
6. 本とインターネットとの接続について考える
7. 本の国境について考える
8. プロダクトとしての本とデータとしての本を分けて考える
9. 本のある空間について考える
10. 本の公共性について考える

評者は、「カレーも本である」の項でしばし笑みが止まらなかった1)。

第4章は、「本の仕事はこれから面白い」の旗印のもとに、著者のアイデア、実践、ブック・コーディネーターとしての戦略などが雑多に示される。著者の思弁は軽やかであり、トリックスターとしての著者の面目躍如といった章である。

以上、駆け足で本書を紹介した。しかし、論理的思弁の書ではないため、全体の要約は困難である。以下に、いささか冗長な目次を転写しておくので、創造力を羽ばたかせて欲しい。実際には、本書を直接に読むにしかず、である。一読をお勧めしたい。

目次

第1章 本と人との出会いを作る

「ブック・コーディネーター」というやや恥ずかしい肩書
才能のなさに気づいてミュージシャンをあきらめる

作りかけの雑誌のデータが消えて編集者もあきらめる

「活字離れ」はぼくたちのせいではない
せっかく入った会社を2か月でドロップアウト

本と人との偶然の出会いを作るユニット
「包む」ことで本と人との「あいだ」を作る

偶然の出会いを生み出す二つの方法
本棚はブランディングの道具になる
本を飲食店のメニューに載せる
紙の本だからこそ「世界で1冊」になる
本はもはや定義できない

第2章 本は拡張している

紙の本ができるまで
日本全国どこにでも早く届ける出版流通
の仕組み
大規模かつ特殊な仕組みの壁を乗り越える

出版流通の外側にも本はある
デジタルの本もみんなのものに
コンテンツよりもコミュニケーションに
熱狂する時代

本はインターネットに溶けていく

第3章 これからの本のための10の考え方

これからの本について考えるために
カレーも本である
もっと読みたいからスキャンする
「Kindle ストア」のネーミングは判断ミス
真っ先にデジタルになったのは「検索」
インターネットと「宣伝」と「販売」と「共有」

本がライブの「体験」になる
本の最小単位は「論点」
新しいフォーマットから新しいコンテンツ
が生まれる

インターネットを欲望する本、しない本
「ソーシャルリーディング」の可能性
世界で出版するコストの激減
紙の本のプロダクト性が際立つ
本の売り方が多様になる
本を介したコミュニケーションの場
「本遊び」から広がる空間
「公共財」としての本
本が「売り物」ではないと想像してみると

第4章 本の仕事はこれからが面白い 「書店」が減っても「本屋」は増える

コンセプトは「これからの街の本屋」
イベントの企画は本の編集と似ている
「毎日」にこだわると「磁場」ができる
ビールも家具も売る理由
これからの新刊書店は「掛け算型」
「本屋はメディア」を本気でやる
「本のある生活」のための道具を作る
使ってみたい道具があるから、本を読む
書店で売ることができる、本以外のものは
何か?

本を作ることだけが出版の仕事ではない
あなたも「本屋」に
本には世界のすべてがある

- 1) 一部の三省堂書店には、「カレーなる本棚」という、日本全国のご当地カレーが県別に並ぶ本棚があります。レトルトのカレーの箱は、ちょうど本と同じくらいの大きさで、側面にも商品名が書いてあることが多く、棚に差ししても判別できます。(中略)本の定義を「出版流通に乗っているもの」から「本棚に差せるもの」へと拡張したみたところで、「カレーも本(のようなもの)である」という地点に至った、というふうに表現することが可能です。